東北地方太平洋沖地震のとき

国立がん研究センター中央病院
臨床検査技師長
三浦隆雄

そのときは，カンファレンス室で１人，会議に備えて机の配置換えを終えた直後にきた．2011年３月11日金曜日14時46分，東北地方太平洋沖地震が眩暈（めまい）したかのようにグラッと発生した．机や椅子が左右にぶれて，窓のブラインドが音を立てて大きく揺れる．きしむ部屋．かなり長い！凄（すご）い！揺れが収まってから，検査室の被害状況を見回る．数カ所の壁紙が切れていた．停電も断水や水漏れもなく，検査業務上の影響はないようだったが，生化学検査の分析装置とその搬送ラインが停止し検査不能とのこと．余震があり，半べそ状態の女子スタッフが机の下に潜り込む．お台場方面のビルから黒煙が上がっているという．窓を覗いて見えたスカイツリーは大丈夫，しっかりと建っていた．

地震発生から約30分後，周囲が落ち着きを取り戻した頃に防災センター本部へ「分析機異常のため生化学検査は不可，その他に異常なし」と被害状況の第一報を入れる．その後１時間ほどで生化学分析装置１台が復活し，緊急検査の対応はとりあえず可能となった．スタッフは地震速報を気にしながらも，残っている業務にいつもより黙々と精をだしているように見えた．時折余震．

18時30分頃，職員は解散してよろしいとの指示がでるも，検査部スタッフの半数は帰宅の足が奪われ病院泊を余儀なくされていた．病院前の通りには車が連なり，レインボーブリッジ上も渋滞しているのが遠くに見える．TVでは見慣れた八戸港に打ち寄せる津波が映し出されていた．船が岸壁に打ち揚げられ横倒しになった．実家は，海岸線からかなり離れているから大丈夫だろうと思い込む．連絡がとれない．

19時30分頃，残る生化学分析装置も稼働し，すべての検査報告が完了した．帰宅したはずのスタッフが戻り，大混雑で電車には乗れそうにもないとのこと．帰宅困難な検査部スタッフ20数名に非常食が配給された．

20時45分頃，搬送ラインがやっと復旧した．これで明日以降の業務にも支障がなく安堵（あんど）したが，もしこの地震が勤務時間外や休日であったら，スタッフや機器メーカーとの連絡不通，交通機関の寸断により，生化学検査は月曜日の午前中ぐらいまでは検査不能であったに違いないと思う．地下鉄の運転再開にともない徐々にスタッフが帰って行った．

23時頃，外の空気を吸うために１階に降りると，外来待合ロビーには帰れない通院患者さんや付き添いと思われる方々が長椅子に横たわっていた．傍をそっと通り過ぎ外に出てみると，道路はまだ渋滞し首都高速は入口閉鎖のためか１台も走っていない．歩道には足早に帰路を急ぐ人も多い．検査部に戻り，東北地方沿岸の壊滅的被害と福島原発の緊急事態を報じているニュースを聞きながら仮眠体勢をとる．津波に流される家や人や車，危機管理，……を思う．電話は一晩中つながらなかった．

翌土曜日８時30分頃，検査業務が平常どおり行えることを確認し病院をあとにした．新橋駅へ向かう途中，八戸から無事の連絡が入る．超満員の電車に押し込まれ，いつもと違う経路で帰宅できたのは昼過ぎであった．

この度の想定外の巨大地震・津波そして原発事故により，被災された皆様に心よりのお見舞いと一日も早い復興をお祈り申し上げます．また，震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りします．